

茶式沿革

無雙御門徒ノ群集如雲^略○中茶飲ミ連歌仕ヲ集メテ朝夕遊ビ興ゼサセ給シカバ^略○下
 「木芽説」このころ^醒○^醒後より茶禮といふ事いひそめたればそのまゝにては、いふもさらなり、さ
 らぬ時人の前にすゝむるにも、やうく其手わざゆるよしあること、は成にけむ、應永の比、大
 勝金剛院の僧正、闕伽井の顯辨上人に、茶たつるやう學びつたへてゑるしおかれたり、かく世々
 につたはるうちに、慈照院のおと、^義○^足利とりわきてもては、やさせ給へりしかば、そのころ奈
 良の稱名寺に、よの中うちわびてこもりゐたる珠光といふもの、いみじくこのみて、これをもて
 あつかふこゝろ、ゑらひはた至りふかき聞えありしを、いとけうある事に聞しめして、ちかくめ
 し給ひつゝ、それにおほせて、こをもて遊ぶくさくのさだめども、さたしおきてさせ給へるよ
 り、世に茶の式はさだまれりとなむ^略○中さて珠光がとりなしつるおきてを、宗悟紹鷗などいふ
 もの、學びつぎつゝ、紹鷗よりせむの宗易に傳へて、つひに今の世の式の如くには、移り來しなり
 けり、

〔嬉遊笑覽^十飲^下食〕茶式の起りは僧家より傳れば、其式も宋の德輝が百丈清規などに本づく、鹽尻に
 妙心寺再住開衣の會を見しに、祝詞畢て饌を設け、後餅果をすゝめ、これを徹して濃茶を出す、數
 十輩の僧なれば、一椀にて茶を點じ、五、六人して次第に喫しぬ、ゑかして立て、主賓揖し堂を下り
 かへる、今濃茶といへば、必一椀を數人して喫ること、思ふは拙し云々といへり、俗説贅辨に、筑
 前國崇福寺の開山南浦紹明、正元のころ入宋し、徑山寺虛堂に嗣法し、文永四年に歸朝す、其頃臺
 一かざり、徑山寺より將來し、崇福寺の什物とす、是茶式の始なるにや、後臺子を紫野大德寺へ送
 り、又天龍寺の開山夢窓へ渡り、夢窓この臺子にて茶の湯を始め、茶式を定むといへり、

〔百丈清規^上〕住持日用

愛嗣法人煎點、若法嗣到寺煎點、令帶行知事到庫司會計、營辨合用錢物送納、隔宿先到侍司、咨稟